

初期曹洞宗教団に見る戒儀の受容

——三帰戒と三聚浄戒——

葛 西 好 雄

道元禪師の菩薩戒は一般に十六条戒と呼称され、三帰・三聚浄戒・十戒からなっている。禪師自身は、如浄から授けられた際の作法書『仏祖正伝菩薩戒作法』で「仏祖正伝菩薩戒」といい、懷辨等は「仏祖正伝戒」と呼称していたようだが、本論では通称に従い十六条戒と呼ぶことにする。

宋代における三聚浄戒

この戒相中、三聚浄戒は中国仏教では菩薩戒の重要な要素となっていたと考えられる。直接の出典は『菩薩地持経』『菩薩善戒経』であり、後に玄奘の『瑜伽師地論』将来によって思想的根柢を強めたが、その間、羅什に仮託された『梵網経』が登場してからは、菩薩戒は『梵網経』とするのが一般的となった。また『梵網経』には三聚浄戒が説かれなかったため、『梵網経』の十重禁戒に三聚浄戒を加えた『瓔珞経』が撰述されるに至り、以後唯識系以外の諸師は『瓔珞経』の構成を踏襲していると考えられている。道元禪師の十六条戒もこの流れ

に属するものであり、これらとは別に「三帰」を戒の一支に数えている。

特に宋代になると、三聚浄戒を菩薩戒と見なしていたと思われる。それは次のような簡単な作業でも確認しうる。平川彰博士は現在まとまった文献として残っている授戒作法を挙げて検討を加えられ、宋代に関しては次のものを上げている。

- ①延寿(禪)『受菩薩戒法并序』②知礼(天台)『授菩薩戒儀』③法宝大師遵式(天台)『授菩薩戒儀式』④元照(律)『授大乘菩薩戒儀』

この四種類を、後に述べる道元禪師の三帰に触れながら見ることにする。これらはいずれも天台の十二門戒儀を基にしている。十二門戒儀は唐代湛然の撰述であるが、確認のために参照すれば、「第一開導、第二三帰、第三請師、第四懺悔、第五発心、第六問遮、第七正授戒、第八証明、第九現相、第十説相、第十一広願、第十二勸持」の構成である。「三帰」は「正授戒」と区別して設けられており、既に「請師」以前に

三帰を済まし、五師を請して更めて正授戒するのである。それでは具体的に正授戒では何を授けるのか。湛然は「第七正授戒者先略示三相。次正授戒言三相者、所謂撰律儀戒撰善法戒饒益有情戒。応須広辨三聚広狭偏円之相、以作行者期心之本」という。つまり「三帰」は戒には含まれず、受戒というのは「三聚浄戒」を受けるのである。①延寿は禅宗系唯一ながら、端本で授戒儀は失われている。ただ冒頭の「盧舍那仏説十地法門、運菩薩之律儀立如来之行業。恒沙戒本円三聚而統收。」^①によって、他の戒儀と同じ様に三聚浄戒を主に取り扱っていたと見なしてよいと思われる。②四明知礼の『授菩薩戒儀』は天台で、構成は「第一求師授法、第二策導勸信、第三請聖証明、第四授三帰依、第五召請聖師、第六白仏乞戒、第七懺悔罪愆、第八問無遮難、第九羯磨授戒、第十略説戒相、第十一発弘誓願、第十二結撮廻向」である。十二門を用いることは湛然の例に従い、内容は少しく異同があるが、やはり三帰は第四にあり、第九の授戒とは別立される。ここでも授戒は三聚浄戒のことである。③法宝大師遵式は天台山外派で、十門構成の「第三帰依三宝」と「第八三番羯磨」と区別している。④元照は四分律宗資持派で、十門構成の「第三帰依求加」の他に「第八加法納戒(乘法授戒)」を設ける点は同じだが、授戒は玄奘の『菩薩羯磨文』を用い、大きく趣を異にする。但し羯磨は三聚浄戒のみしか記さず、「第九説相示誠」で

は『梵網經』を指示する。

また次のような事例が挙げられる。中国仏教では早くから三聚浄戒を依用したが、宋代になると、四分律宗でも元照の資持派では『梵網經』を採用するのは先の④にも見られ、菩薩戒を増受するようになる。しかし南宋末の日山守一は、日本^②の俊仍からの疑問に対する守一の師如庵了宏の解答に更に決を下した。白四羯磨により円の戒体が発して三聚浄戒を納め、三聚浄戒が菩薩の縁となるのであれば、梵網等の大乘戒の更受は必要ないとし、具体的大乘戒相を棄捨した三聚浄戒と二百五十戒からなる戒儀を定めた。(『終南家業』上)これは我が国にも影響を与え、宋代の三聚浄戒偏重を象徴的に物語っている。

初期永平寺僧団への影響

瑩山禪師の『三木一草事』では、次のような伝承になっている。

菩薩戒相伝事。宗家一大事因縁。故少林僅六人也。南岳其一人也。

或伝云。三聚戒也。又俗一人与皮肉骨髓四門人也。菓山十八人。洞

山廿人也。開山永平和尚有別願授戒。殆將及千人。然而正伝戒法

纒五人也。并和尚授戒六百余人。伝戒纒五人也。介和尚授戒三百

余人。伝戒纒四人也。紹瑾授戒已七百余。自正応及元享。殘年不

知幾年人数幾。伝戒又十余輩。現在七人也。介公云。唐土在家男

女有受戒事。此授三聚戒。如我朝結縁灌頂之。

問題とすべきことはいくつかあるが、傍線部②を見ることにする。宋朝では在家の男女まで受戒をしているとの義介の発言である。これを三聚浄戒であると限定している。義介は道元禪師叙後、懷葬の命により正元元年に（一二五九）入宋しており、この時に実地に見聞したことである。これと同じことと目されるものが、栄西の『興禅護国論』第九門に記述されている。

又宋朝奇特、有二十箇。……十僧多知死期。十一俗人持菩薩戒。十二童子持五戒。……。

当時本朝でも南都北嶺の授戒会が恒規の行事となっていたが、衆生済度の目的で在家者が在家のままにて受けるということはなく、栄西の耳目を驚かせたのであろう。但しここには三聚浄戒とは明言されていない。が、栄西の菩薩戒も三聚浄戒を代表とするもので、「梵網經三聚浄戒。十重四十八輕戒。」（岩波・思想体系『興禅護国論』、一〇〇頁）、「是故比丘二百五十戒。菩薩三聚十重四十八輕戒。堅固護持。」（同一一八頁）と見られ、『梵網經』に説かれていない三聚浄戒を十重四十八輕戒と共にあげ、また「三聚浄戒今正当授、菩薩浄戒三聚為最。」（『受戒作法』）、「是ヲ発得スルヲハ第一ノ摂律儀戒ヲ受ト申ス也、此戒内二十重禁戒モ四十八輕等ノ輕重ノ諸禁戒皆納ル也。能々戒行ニ習知リテ菩薩ノ三聚戒ヲハ授クヘ

キ也。」（『円頓三聚一心戒』）と、菩薩戒とは三聚浄戒であること、十重四十八輕戒も摂律儀戒に摂せられると説くからである。そしてこの義介・栄西の発言は、前節で触れた当時の宋朝の授戒の在り方を、見聞したままに率直に言い得ているのだと思う。

それでは道元禪師においてはどうかであろうか。これらの立場と明確に差違が認められるものではないが、同時に三聚浄戒を取り立てて論じることもない。むしろ周知のように『正法眼蔵』「帰依仏法僧宝」巻では「仏弟子となること、かならず三帰による。いづれの戒をうくるも、かならず三帰をうけて、そののち諸戒をうくるなり。しかあれば即ち、三帰によりて得戒あるなり。」とし、禪師は宋代の諸々の戒義が戒のうちに含まれない三帰をもって、得戒の根拠としている。先に述べた宋代仏教の在り方からすれば、三聚浄戒を特筆しない方が異例であり、そのことこそが禪師の主張の一つであるのではないか。これが宋朝禪を見聞した栄西・義介と同様に、宋朝の風儀を具ぎに見聞した道元禪師の視点であれば、わずかな相違といえども看過するわけにはいかない。

三帰は釈尊とその教え・教団に対する信仰を表明するもので、原始仏教以来律蔵に説かれるものである。一方、三聚浄戒は大乗經典・論蔵に説かれ、その解釈については瑜伽戒系の摂律儀を原始仏教以来の律儀戒と規定し、これに摂善法・

撰衆生戒を加えて大乘戒とする立場と、撰律儀が大乘の禁戒、後の二を八万四千の法蔵やその理念を包摂するという立場の二説に大分される。要約すればどちらも大小乗戒を理念的に統合するものであるが、換言すれば大小乗戒の別・出家在家の差・具体性の欠如などそれぞれの特色を相対化し、有名無実になる傾向も認められる。一般に小乗戒は事戒であり、大乘戒は理戒であると言われるが、三聚浄戒はこの理戒の根拠としての性格を有している。道元禪師の十六条戒は、これらに十戒が付されたものであり、この十戒が十六条戒の具体的な戒相となる。

ここに三帰と三聚浄戒と十戒という三種の分類が提起されるが、栄西・義介などの入宋僧は大小乗戒を止揚する三聚浄戒という理念を用い、道元禪師は律蔵に根ざす三帰という信を重く見たと推定できよう。

何故この峻別が必要かといえ、義介の残した『御遺言記録』では、義介は懐鑑より達磨宗徒として菩薩戒を受けており、おそらく道元禪師下としての菩薩戒の相承はなかつたと推定されるからである。『御遺言記録』に記録される伝法は、以前拙論にて本来菩薩戒もその中に含まれるべきことと、特に義介自身に関する記述で菩薩戒の授受について不明瞭であることを指摘した。義介には恐らく達磨宗の菩薩戒を相承した理由により、嗣法と受菩薩戒を明瞭に区別する必要性が

あったと思われる、彼が道元禪師下の菩薩戒を相承していないことは、その資の瑩山禪師が義介より菩薩戒の相承をせず、時の永平寺住持義演に従い、作法その他の伝授を許されたことから推定しうるのである。そして入宋経験のある義介の志向は、同傾向を有する栄西の流儀に一致し、栄西説、もしくは宋潮流をより適したものと受容している可能性がある。例えば瑩山禪師の著書に散見する栄西流は、道元・懐辨の伝承の他に、義介の指示が多分にあつたことが考慮されなければならない。

以後入宋した義介の戒観をもとに、瑩山禪師の『三木一草事』に見られるような曹洞宗の受戒が歴史的に定着・敷衍されていくが、それらはいくまでも義介が宋朝で受けた印象を基に成立したもので、道元禪師が思想的に熟慮淘汰したものは異なると考えられる。その差を本稿では三帰と三聚浄戒に代表されるものと見るのであり、更にその径庭について発表する用意があるが、その一つとして『三木一草事』の傍線①には誇張か語弊があると思われるので、この問題を次稿にて更めて取り上げる予定である。（註記略）

（キーワード） 三帰、三聚浄戒、道元、義介、三木一草事

（曹洞宗永見寺住職）